

アユの漁獲と資源状況について

1. 今シーズン(H29年12月～)のアユの漁獲状況

- ・琵琶湖漁業の最重要魚種であるアユは昨シーズンに記録的不漁(図1)。
- ・鮎苗(活魚)で平年の6/10、鮮魚で1/4で全体として平年の1/3程度と推定。

①鮎苗(活魚)の漁獲状況

- ・今シーズンは3月末までは平年並とはいかないものの、漁獲は一定改善。
- ・3月末までの累積漁獲量は24.6トンで、昨年の2.5倍であるが、過去5年平均の68%。
- ・資源状況から5月以降の漁獲の伸びは期待できないと推測していたが、4月当初からエリ(小型定置網)の漁獲が低迷。
- ・4月以降が漁期となるヤナ(河川)や追いさで網(湖岸)は、4月後半から獲れ出し、漁獲量は平年並み。
- ・4月期の全体漁獲量としては過去5年平均の66%。

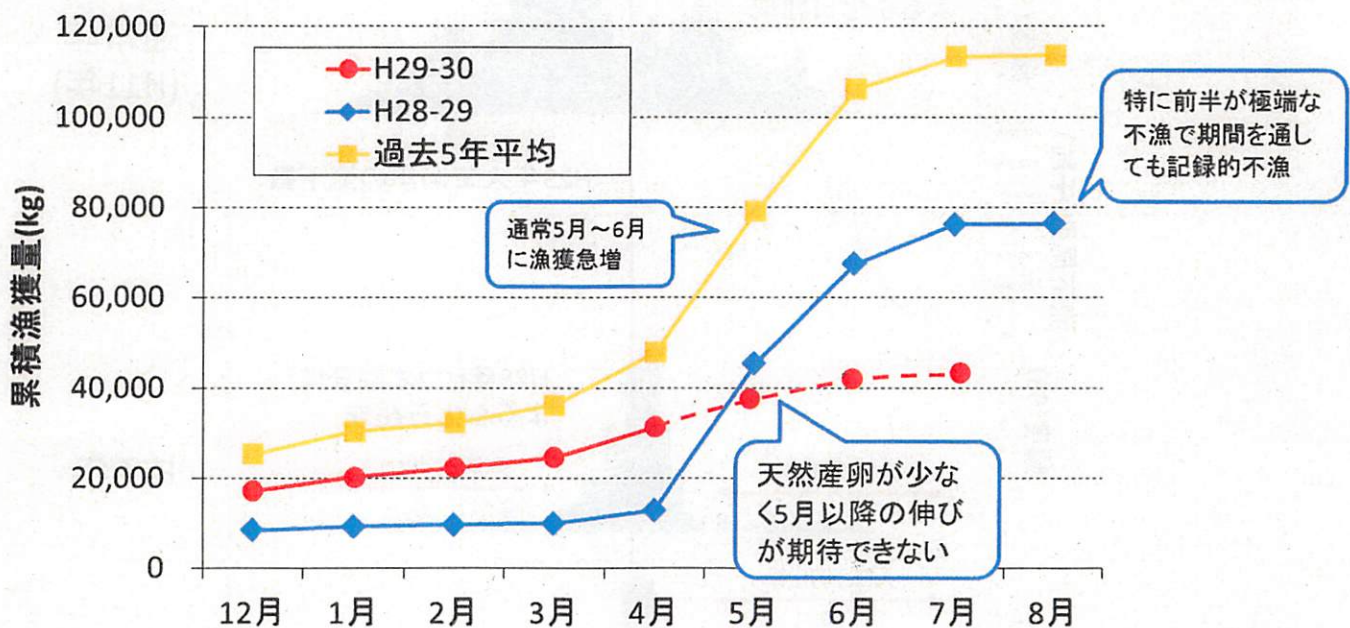


図1 鮎苗の漁獲量の推移の比較

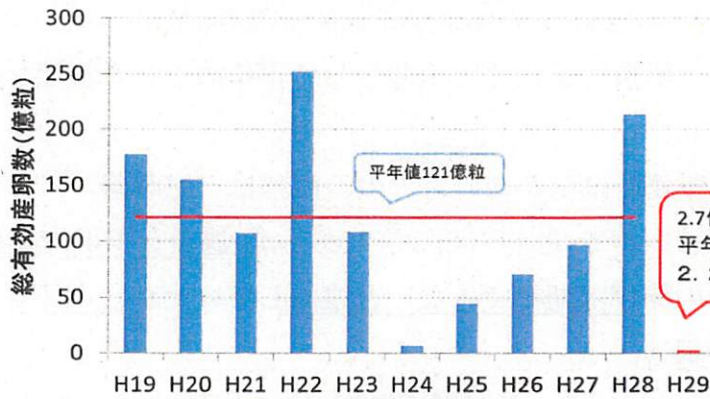
②鮮魚の漁獲状況

- ・エリ、ヤナ、追いさで網で漁獲されたアユは、鮎苗として優先的に販売されており、鮮魚としての流通に回る量は少ない状況。
- ・刺網漁業では、1隻あたり数十キロの漁獲があり、昨年同時期に比べると多いが、平年に比べると少ない状況。

2. アユの資源状況

① 産卵状況

- ・昨年秋の天然河川での産卵は2.7億粒で平年の121億尾と比べて2.2%と極めて少なかった(図2)。



アユ産卵用人工河川

図2 産卵数の推移

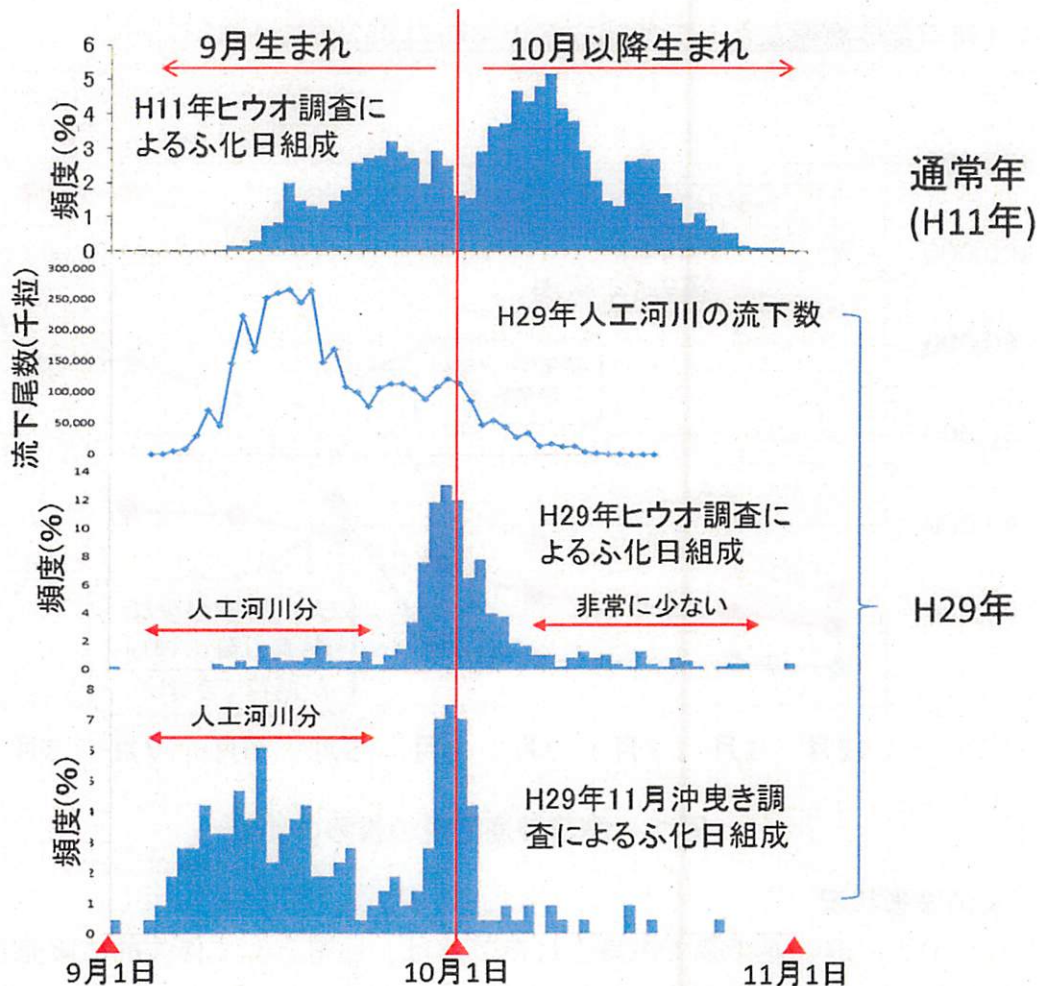


図3 ふ化日組成の比較

通常年(平成11年)と比較すると、平成29年は10月以降生まれが非常に少ない。
主に9月生まれは漁期前半に、10月以降生まれは漁期後半に漁獲される。

- ・アユ産卵用人工河川に放流する親魚を増やし（8トン→18トン）、例年より多く産卵させたが、天然河川での産卵が少なかったため、全体としての資源は平年の20%弱と推定

表1 天然河川と人工河川の流下数の比較

	平 年	平成 29 年	平年比
天然河川	215 億尾	5.4 億尾	2.2%
人工河川	24 億尾	38.5 億尾	160%
合 計	239 億尾	43.9 億尾	18.4%

② 魚群調査結果

- ・周回コースでの魚探調査による、魚群数は1月から3月までは平年比11~25%であったが、4月には更に4%まで減少し。（表1）。

表2 周回コース魚群数の推移

	1月	2月	3月	4月
魚群数	66	87	38	10
平年値	339	347	347	257
平年比	19%	25%	11%	4%

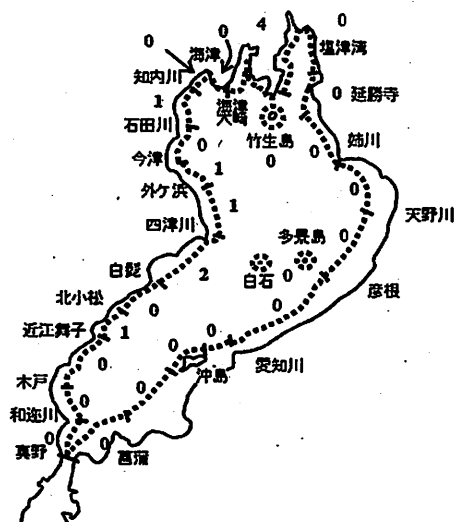


図4 4月周回コース魚群調査結果

3. アユ不漁への対応

- ・当初予算においてアユ産卵用人工河川への親アユの放流量増加を計画。
通常年8トン→15トンに増加
（参考：昨年度 当初予算8トン→補正予算10トン追加→全体で18トンを放流）
- ・アユの漁獲および資源状況を注視していく。

4. 不漁原因解明の取組

- ・不漁原因については、昨シーズンは通常9月中であるアユのふ化が10月以降に遅れるとともに、一時期に集中したことによる密度効果などにより、著しく成長が遅れたためであると一定絞り込み。
- ・水産試験場と琵琶湖環境科学研究センターが連携し、国立環境研究所琵琶湖分室、国の水産研究機関の助言もいただきながら環境面など広い視点を含め、今後も引き続き検証等を進める。